

中国無人機の日本領空侵入が引起す問題

漢和防務評論 20140523（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

中国無人機が日本領空に接近あるいは侵入する目的は、日本側の反応を見計らうとともに、尖閣群島の測量を行うなど既成事実を積み上げ現状の変更を図ろうとするものでありましょう。

無人機は、運用上融通が効かない面もありますが、損耗に対するインパクトが小さく、輕易に相手の反応を探れる利点があります。

漢和防務評論に関連記事がありましたので紹介します。

KDR ドバイ特電：

信頼できる中国軍事工業界の消息筋は次のように述べた：中国軍の無人機は、すでに 2013 年 6 月下旬に尖閣群島/釣魚島付近の日本が主張する日本領空に実際に侵入した。日本側は如何なる反応も示さず、戦闘機の迎撃も無かった、と。この中国情報は、日本側の公式の確認を得ていないが、中国消息筋の地位から見て確度が高い。2013 年のシャングリラ会議において、中国の將軍たちは **KDR** に対し次のように述べた：日本側が先に現状を打破したので、中国側も通常の“釣魚島パトロール”方式で現状を打破し、新たな“現状”を作らねばならない、と。

中国無人機が中日間で争議のある尖閣群島領空に侵入する可能性は、すでに **KDR** が何度も指摘していた。日本側はなぜ戦闘機を緊急発進させなかったのか？もしこれが事実ならば、これは第一回目の中国無人機による領空侵入になる。

KDR の分析は以下の通り：小さ過ぎる無人偵察機は、レーダー、赤外線（IR）信号が微弱で、その上超低空飛行なので、必ずしも地上レーダーや **AWACS** によって直ちに発見されるわけではない。F-15 戦闘機による追尾や追跡は、速度が遅い無人機では相当困難である。

したがって近年来、国際航空市場では、各国が IR 搜索システムを搭載した無人機対応のレシプロ・エンジン攻撃機を推奨している。今年のモスクワ航空ショーには機番号 779 のレシプロ・エンジン攻撃機を展示した。主たる機能は、低速無人機への迎撃及び対地攻撃である。

日本の防衛省は、2013 年に Y-12 型観測機が日本側主張の領空に侵入したと発表した。それ以後、類似の事件は発生していない。その後日本の主流マスメディアは、防衛省の消息筋の話を引用し、もし中国無人機の領空侵入事件が発生

した場合は、撃墜の可能性を排除しないと述べた。「産経新聞」は、防衛省は領空に侵入した J-10 戦闘機を強制着陸させる作戦計画を研究中であると報道した。中国無人機の日本側主張の領空への侵入事件は、心理戦、宣伝戦、主権主張に巨大な効果がある。現時点で推測できることは、もう一つの可能性として、無人機を利用して争議のある島嶼を測量し、写真及び正確な地図を作成することである。したがってこれに観測用無人機を利用する可能性がある。また中国海軍は、最近無人ヘリの利用を開始した。この無人ヘリは、尾部甲板から離発艦でき、速度は遅く、レーダー反応信号は微弱である。KDR の判断に誤りが無ければ、各国海軍が今後直面する新型作戦型式は、艦載レーダーや早期警戒機の探知を逃れ得る可能性がある対艦ミサイル携行の攻撃型無人機及び超低空を飛行する攻撃型無人機への対処であろう。これが 21 世紀の主力艦が新たに光電探知システム及び快速砲を装備する理由でもある。

無人機が戦闘機と異なる特性は、たとえ日本側のレーダーが中国無人機を探知できたとしても、型式の確認は不可能であり、無人機とは無線交信が出来ず、速度は一定で、決められた飛行場での離着陸しかできないことである。

以上